

江戸の防火意識  
—平賀源内と町奉行—

作家 童門冬二

## 燃えない布を防火具に

江戸中期に田沼意次（たぬま・おきつぐ）という老中筆頭（今の総理大臣）がいた。遠江（静岡県西部）で六万石の領地を持つ小大名だったが、頭はずば抜けて良かった。前代の将軍徳川吉宗（八代目）が、外国から日本にいない動物や鳥あるいは植物などをしきりに輸入して、日本の正貨が流出した。田沼は国益上これを取戻そうと考えた。最初に眼を着けたのは、鎖国以後も貿易を続けている中国である。中国は現在でもそうだが“食の国”だ。田沼は、部下に命じて中国でその食の中でも何が重視されているか調べさせた。部下は、

「中国の食材で重んじられているのは、ナマコ・フカヒレなどの海産物でございます」と報告した。田沼は頷いた。部下が調べて来た食材は、日本の三陸地方や蝦夷（北海道）などで沢山採れる。田沼は膝を叩いた。そして、

「三陸や蝦夷の漁民に、中国が重んずる食材を捕獲させよ。これを中国に売れば、流出した日本の正貨が取り戻せる。また三陸や蝦夷の住民も新しい収入が得られる」と考えた。

この政策は当たった。日本の北方で、中国の好む食材がどんどん捕獲され、大量に輸出された。正貨がどんどん戻って来た。味をしめた田沼はさらに、

「これを漢方薬にも及ぼしてみよう」と考えた。日本の医術はほとんど中国のそれに拠るものであり、同時に薬も同じだった。田沼は、

「地理地形が同じなら、漢方薬のもとになる薬草が日本にも生えているはずだ」

と考えた。この採集のために、讃岐（香川県）から、科学者の平賀源内を招いた。源内に、

「日本中を歩き回って、漢方薬のもとになる草を採集して来い。それを江戸で展示会を開け。そうすれば、おまえが取りこぼした薬草を、現地の学者が提供してくれるだろう。そうすれば、日本でも漢方薬が輸入せずとも自家生産できる」源内は感心した。日本にもこういう政治家がいたのか、と喜んだのである。源内は諸国を回り、千三百種類の薬草を採集して、江戸の両国橋で展示会を開いた。田沼の予言通り各地方の植物学者が、

「平賀さんも気が付かなかった当地の植物だ」といって、漢方薬になる植物を次々と提示した。

その源内がある日江戸の町を歩いているときに、突然つまずいて前へ倒れた。源内がつまずいたのは大きな石だった。源内はずっとその石と睨み合いをした。が、見当がつかない。そこで源内は、庭の池にこの石を放り込んだ。が、変化はない。源内は池の中に入って石を拾いだし、また座敷に飾って睨みつけた。源内は、

「この石は石綿だ」と、やっと石の正体に気がついた。源内は科学知識が豊かだったので、石綿か

ら“燃えない布”を作りだした。“火浣布（かかんふ）”と名づけた。そして、この火浣布を防火具に仕立てようと考えた。それも、規模の小さいものではなく、公の用に立てようと思いついた。たとえば、隅田川畔に並んでいる食糧の倉庫（蔵）が立ち並ぶ蔵前で、この火浣布で大きな袋を作って蔵にかぶせれば、火災が起きた時も燃えずにすむと考えたのである。

## 源内の案を退ける町奉行

われながら、（いい案だ）と思い、町奉行所に出掛けて行った。町奉行は現在の警視總監と消防總監を兼ねている。当時の町奉行は土屋と言った。会ってこの話をした。土屋は一応感心した。が、こう言った。

「せっかくの平賀殿の案だが、わしとしては江戸でお主の発明した火浣布の袋を用いたくない」

「なぜですか？」源内は多少の不満の気持ちを示しながら訊いた。土屋奉行はこう応えた。

「今の田沼様の御政道は、確かに経済は盛り上がっているが、その分だけ民心がゆるんでいる。かつては、江戸の防火は、大名や旗本が受け持っていたが、今は町民も担当している。町火消だ。田沼様の御政道は商業を重んずるので、金万能の世の中となって、民の心もそっちに走ることが多い。危険だ。わしは町奉行として、江戸の町の防災も担当している。災害はいつ起こるかわからない。そのために、特に町火消は緊張感を忘れずに、日々を過ごさなければならない。お主の発明した火浣布で蔵前の蔵にかぶせれば、確かに火は防げよう。しかしそれが習性となると、いよいよ町火消の心をゆるむ。安易になってしまう。したがって、せっかくだがわしはこの火浣布で作った袋を蔵にかぶせたくはない」

そう言った。聞いていて源内は次第に土屋という町奉行の誠心に感動した。

（この人は本物の武士だ）と思った。源内も良心を持っていた。奉行の話聞き終ると、源内は、「さすが名奉行といわれる土屋様です。恐れ入りました。わたしの考えが安易でした。おっしゃる通りです。火浣布の袋を蔵にかぶせれば、たしかに蔵は燃えずに済みます。しかしその分だけ、江戸町民の心がさらにゆるむというお話は、この身に痛く沁みます。持って参りした案は取り下げます。どうかご無礼をおゆるしてください」

そう詫びた。土屋奉行は、なんのなんのと宙で手を振って、

「しかし、平賀殿の防災に対するご助力は決して忘れません。また、ご意見があった時はぜひお話し下さい」

と言った。田沼政治は、国益につながる政策もあったが、個人的には必ずしも評判がよくは無かった。それは田沼が、“汚れた宰相”として、賄賂政治を黙認していたからである。黙認しただけでなく、自分もその色に染まっていた。そのため、

「少しぐらいなら俺もいいか」

と、まず江戸城の役人で悪習に染まる者もいた。それがどんどん広がれば、世間一般の風習も灰色になり、さらには真っ黒になる。その意味で、良心的な人々は、

「田沼様の政策は、国益を増しているかも知れないが、その財貨は汚れている」

と批判する者も多かった。町奉行の土屋もその一人である。かれは、

「汚れた金で財政を豊かにしても、人の心が汚れてしまえば逆効果だ」と思っていた。だから平賀源内が提起した、“火浣布による大きな袋”の案も、土屋は、

「田沼様の汚れた政治をさらに助長させる」

と考えて、防災の利益になっても、その策が汚れていてはならない、と考え、退けたのである。